



社長就任のご挨拶

ぶぎん地域経済研究所
社長 大芝 芳郎

この度 松島 博の後を受け、社長に就任いたしました大芝でございます。皆様方には弊社をご愛顧賜り、また「ぶぎんレポート」をご愛読いただき誠にありがとうございます。

さて、改めて申し上げるまでもなく、弊社は武蔵野銀行のシンクタンクとして、埼玉県を中心とした経済活動の実態分析や先行き見通しに関する経済調査と、企業経営のお役に立つべく各種セミナーの開催のほか、経営全般や税務、相続等のコンサルティング業務を二本柱として活動を展開しております。

このうち、経済調査につきましては、埼玉県のみならず日本経済全体のマクロ経済指標の収集・分析に加えまして、県内企業の皆様に対するアンケート調査やヒアリングを通して景気の実情把握に努めているところであります。

私自身の40年近い銀行員生活を振り返りますと、マクロとミクロのどちらがより重要ということではなく、両々相俟って正確な情勢分析ができるのではないかというのが実感です。マクロの経済指標は経済の実態を把握するうえで不可欠ではありますが、それだけで経済の実情が理解できるとは限りません。それは一つにはマクロの経済指標には、依然としていわゆる「認知のラグ」つまり時間的なずれが生ずることと、いま一つには企業や家計行動のマイクの微妙な変化が捉えきれないという問題があるように思えるからです。

これに対し、ミクロの調査やヒアリングは時々刻々変化する景気動向を個別具体的にリアルタイムで把握できるほか、相互の意見交換を通じて個々の企業が直面している課題を克服していく道筋を見い出せる喜びがあり、銀行員、

あるいは調査マンとして生き甲斐を感じるころです。ただし、ミクロの面からのみ景気全体を論ずるのは、個別企業ないしは業界の特殊性から限界がある点は十分認識すべきであり、そうした観点からマクロの鳥の目とミクロの蟻の触角とを合わせ持つことが重要であると感じております。

もう一点、経済を見るにあたって留意しなければならないのは、近年における急速なグローバル化の進展であります。2年近く前、リーマン・ショック時に、日本では金融危機自体の影響は欧米諸国に比べかなり限定的であった訳ですが、それにも拘らず自動車や電機をはじめとした輸出関連企業を中心に我が国の景気の落ち込みが世界的に見ても最も厳しかったのはご承知のとおりであります。また、最近でも、南欧諸国の財政・金融問題を契機に世界的にリスク回避の動きが強まり、大幅な円高が進行、これがようやく回復しかけた株式市況に影響を与えたといい展開が続いております。さらに、中国をはじめとする新興国の急速な経済発展に伴い、一部の資源価格が高騰しコストアップをもたらす反面、新たな巨大市場が誕生したことからスーパーやコンビニを含め、従来は完全に内需型産業であった業種でも大挙して東アジア諸国等へ進出しているのが現状です。

このような中で、埼玉県、さらには個々の企業の進むべき道について経営者の皆様の生の声を伺いつつ、調査・分析を行うとともに、今後とも武蔵野銀行と一体となり、グループを挙げてお取引先のお役に立つ、精度の高い情報発信に努めてまいる所存ですので、引き続きご支援のほど、よろしくごお願い申し上げます。